

～テレビによる後天的な言葉遅れ～

①現状

今、保育園では笑わない赤ちゃんが増えています。多くの赤ちゃんはすでに生後3～6ヶ月で表情が乏しく、微笑みが消えています。このようにコミュニケーション不足が近年急激に増加し、社会不安が高まっています。長時間テレビの視聴が、こどもの成長や発達に悪影響を及ぼすことは万人が認めるところであります。テレビがついていること自体が、生後間もない乳児には最悪であることに気付いていません。大人はテレビが放映されていても、意識しなければ音と画面は頭に入ってきません。ところが、乳児にとっては、テレビがついていると、常時、視覚や聴覚が反応し、脳を占拠してしまい、生身の人間の顔や声が入ってこないのです。

人間に生まれて1～2年間、保育者との応答的環境が阻害されたら、人間の魂（心の理論）は育たないまま生きていくだけです。私は全国の保育園や幼稚園中心に講演にまわるとき、テレビ視聴のアンケート調査をしていますが、3～5家族に1家族で朝から晩までテレビがつけばなしで、そのうち5～10人に一人の赤ちゃんがコミュニケーション不良をきたしています（出生30～50人に1人にあたる）。テレビがついていても、その5倍ぐらいの時間を抱っこしてあやしたり外へつれて出て、応答的環境が十分確保できれば問題は発生しません。彼らが1～3歳になると、他者とのコミュニケーションがとれず、専門機関へ紹介され、コミュニケーション障害（すなわち自閉症、自閉傾向、広汎性発達障害など）と診断されます。その診断、治療に迷っている両親が、インターネット、新聞、雑誌等で私の著書に出会うと、直ちにテレビ・ビデオを消して、私へ連絡してきます。全国各地からやってくる、2～3歳のコミュニケーション障害児は2,000名を超えています。

最近5年間は、患児の生い立ちの生活記録ビデオを持参してもらっています。400人分のビデオが手元にあります。そのビデオを見ると、コミュニケーションが失われていく状況がよくわかります。また、テレビを消した後の回復もよくわかります。

②事例

5ヶ月女児A	表情がない。笑わない。視線が合わない。声が出ない。
7ヶ月男児B	喃語が出ない。泣かない。うつぶせにしても首を上げないけれども、口の中へ足の指や手指を入れて遊ぶ。
8ヶ月男児C	寝返りしない。からだが柔らかく、首がすわらないけれども手で足を持って遊ぶ。
1歳男児D	常に歩きまわる。呼んでも振り返らない。 テレビ・ビデオがついていると傍にすぐいく。指差ししない。目と目が合わない。
1歳6ヶ月男児E	歩かない。いざって移動する。「ムニャムニャ」など独り言が多い。
1歳8ヶ月女児F	1歳時には歩いてしゃべれたのに、1歳8ヶ月時には表情がなくなりしゃべれない。 呼んでも振り返らない。目を合わせない。1歳以後ビデオ漬けで育ったことが判明した。
2歳男児G	テレビの音楽場面では「キャッキヤ」と大声を出しているのに人間に対しては無言で声を出さない。指差しはできる。ジェスチャーは通じる。
2歳2ヶ月男児H	表情なく、テレビの方を食い入るよう見つめる。発声はない。指差ししない。 いつも走りまわる。同じしぐさを繰り返す。
3歳男児I	笑うだけで呼んでも返事が返らない。高いところへ登る。 数字・動物の名前・絵本を暗唱するが、話ことばはない。指差ししない。目線が合いにくい。
4ヶ月男児J	抱っこしているとき、授乳しているとき、眠っているときなどに、体をそり返り泣き叫ぶ。 日中あお向けでそり返って頭上へ移動する。喃語が出ずおとなしい。笑いが少ない。
3ヶ月女児K	空腹、苦痛、眠気など思い当たることがないが、突然大泣きする。 夜泣きが多いが、明るくして、テレビをつけているとよく眠る。
1才2ヶ月女児L	「はいー」の返事も、バイバイのまねもしない。親の言っていることが何にも理解できない。 9ヶ月で1人歩きし高いところへ上がるのが好き。
4ヶ月男児M	見えない方向からの声に反応しない。テレビの音にはすぐ反応する。 表情が少なく、喃語が出ない。
1才6ヶ月男児N	【いないいない、ばあ】・【お頭てんてん】・【かくれんぼ】など、ごっこ遊びをしない。 後追いや人見知りがない。自動車やおもちゃで1人遊ぶ。

③解説

◎ なぜ、意思表示ができず、言葉が遅れ、他者とのコミュニケーションがとれないのか？

生まれてから少なくとも 2 歳まで赤ちゃんの言動に correspond してくれる他者(母親などの大人)が傍にいたことが絶対的条件です。とりまなおさず、テレビ・ビデオ・CD・メリーゴーランド・BGM・電子おもちゃなど“音”“映像”環境にはまるのはもつてのほかです。

◎ なぜ、2 歳まで意思表示ができず、言葉がない子どもに、“様子をみましょう”とか“経過を見ましょう、声をかけて”という説明は危険なのか？

様子をみる”とうことでは、赤ちゃんは何も変わりません。テレビを消すという気づきが一番大切です。2歳までの育ち方をふり返ってみれば、生後5~6ヶ月が愛着の原点であることがわかります。「いない、いない、ばあ」遊びから始めます。ワーキングメモリーシステムをいかすと前頭前野が育ちます。2回目からは覚えていたお母さんの顔が見えたことで喜びます。赤ちゃん自身の体験不足(脳の未発達)が原因ならば、気づきが早いほど体験できるきっかけが増えます。赤ちゃんの基本的な発達には、その能力を発揮できる適切な時期である“臨界期(感応期)”があります。五感(見る、聞く、匂う、味わう、触れる)の発達は、生後もっとも早く3~4ヶ月で完成します。運動(手足を動かす、体をささえる、目標に向かう)は1歳までに、そして総合的に言葉は2歳で育つのです。

◎ なぜ、米國小児科学会は今、18ヶ月齢(1.6歳)と24ヶ月齢(2歳)の時点で、すべての小児の発達スクリーニング検査を小児科医師に呼びかけたのか？

発達障害と診断される小児が近年急速に増加し、普通に生まれた新生児にもそのリスクが高いことが分かったためです。そのガイドラインは、親の呼びかけに反応がなく振り向かない、笑わない、視線をあわせない、指差ししない、言葉が出ない、周囲に無関心、といった症状をあげています。早期診断・早期介入の重要性を強調していますが、テレビなどの“音”“映像”環境には一言も触れていないのは誠に残念です。

発症要因が不明なまま、多くのコミュニケーション不良を見つけて、どうしようとしているのでしょうか

◎ なぜ、乳児は何でも知っているのか？

サーゲイ・サンガー氏(「乳児はなんでも知っている」著)は 20 数年前、赤ちゃんの行動を、ビデオ記録と心臓・鼓動音の測定によって分析し、赤ちゃんの一生は生後 12 ヶ月の育ち方で決まると述べています。生直後から言葉がでるまでの時期、赤ちゃんが心を通わせる 3 つの原則があります。

- ① 赤ちゃんの言動にオウム返しで答える。
- ② ストレスに強くなるための“静かさ”の使い方を学ぶ。
- ③ 周囲の雑音を消す。

親子の絆を増幅させるシステムは、“静かさ”が日々の生活のスタイルとリズムになってこそ、機能するようになっていきます。近代国家の生活には、テレビ・ビデオ・CD・ゲーム・電子おもちゃなどの音を発するものがおびただしく入り込んでいます。こうした“音”の浸透が、赤ちゃんとお母さんをつなぐ本質的なシステムを壊しています。先進国家は、調和の取れた親子なら誰でも持っているはずのテレパシーに近いコミュニケーションの感覚を失ってしまったのです

◎ なぜ、テレビ(映像と音)がついていると、コミュニケーション障害をきたすのか？

- ① 応答的環境がないと、自己認識の発達不全が起こる→心の理論が育たない
- ② テレビの直接的環境→空間認知が育たない
- ③ 実体験が不足すると、シンボル化能力が育たない→デジタル認識

◎ なぜ、コミュニケーション障害に行動療法は危険なのか？

愛着が育つことと、子どもに指示して教え込むことは相反することです。赤ちゃんが他者と心を通わせる人生の始まりの時期に、大人は赤ちゃんの言動にオウム返しで応えねばなりません。